What's OISCA

オイスカ·インターナショナルは、「すべての人々がさまざまな違いを乗り越えて共存し、地球上のあらゆる生命の基盤を守り育てようとする世界」を目指して1961年に創立され、現在36の国と地域に組織を持つ国際協力NGOです。

公益財団法人オイスカは、1969年にオイスカ·インターナショナルの基本理念を具体的な活動によって推進する機関として生まれ、主にアジア·太平洋地域で農村開発や環境保全活動を展開。特に人材育成に力を入れ、オイスカの研修を修了した現地の青年は、各地で地域開発に取り組んでいます。国内では農林業体験やセミナー開催などを通して啓発活動を積極的に進めています。

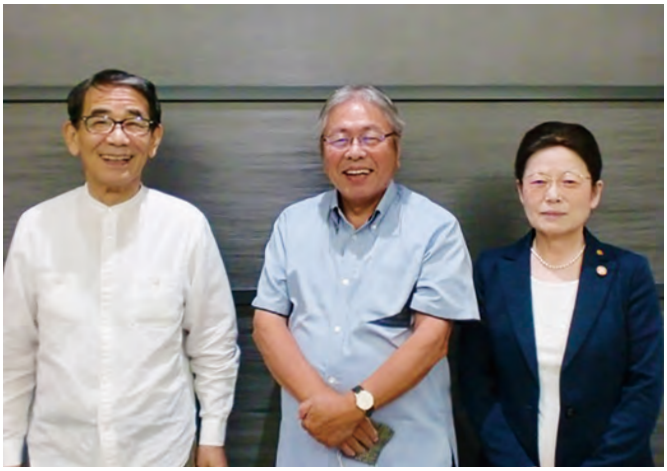
OISCAの標章

オイスカの世界観がこの標章に象徴的に表されています。天（青）、火（赤）、水（水色）、地（黄）、それにこの4要素を調和的に活動させ、人類万物のいのちを生成発展させる源である「宇宙」を表す黒です。

OISCAという名称の意味

O	rganization	機構
I	ndustrial	産業
S	piritual	精神
C	ultural	文化
A	dvancement	促進

人間の生存に不可欠な三要素"産業·精神·文化"のバランスを大事にした発展を世界規模で推進していくことを目的として、このように名付けられました。



2000年代、ODA改革の長い道のりを共に歩んだ渡辺会長（左）と荒木主幹の付き合いは20代の頃までさかのぼるという

※今回の鼎談は「国際開発ジャーナル」11月号との連動企画として実施しました

鼎談メンバー

中野 悦子　オイスカ理事長

荒木 光弥　国際開発ジャーナル編集主幹

渡辺 利夫　オイスカ会長

今月の表紙写真

Photo by Yukihiro Ishibashi

1992年の「子供の森」計画の一コマ。木を植えている子どもたちも、今は立派なお父さん、お母さんになっていることでしょう。育った森が地域の財産となり、未来へと引き継がれていきますように。（フィリピン·サガイ市）

特集

オイスカ創立60周年記念鼎談

地球規模の思想をつくる

オイスカが60年にわたって取り組んできた国際協力活動は多岐にわたる。創立時から時代が流れ、世界情勢が大きく変化する中、これまでの活動を振り返ると同時に、未来がよりよいものであるために、オイスカが果たすべき役割、進むべき道とはどのようなものなのかを考える。

中野　今日はオイスカの創立60周年を振り返り、これからのオイスカの歩むべき道についてお話ができたらと思っています。日本で唯一の国際協力専門誌の編集に長く携わりながら日本の国際協力をけん引してこられ、オイスカのことも長年見ていただいてきた荒木さんに進行役をお願いしまして、渡辺会長にもご参加いただき、いろいろとお話をおうかがいしたいと思います。よろしくお願いします。

荒木　よろしくお願いします。渡辺先生と僕とのお付き合いは長くなりますね。個人的なことは別として、国際開発ジャーナル誌（以下、ジャーナル）の創刊の時ですから、1967年ですね。その頃渡辺先生ははまだ慶応義塾大学の大学院生でしたか？

渡辺　ええ、別の大学で3年くらい給料をもらいながら大学に通っていた頃です。

荒木　うらやましいな（笑）。まだパリパリの〝青年渡辺〟の頃に、ジャーナル創刊2号に執筆いただきましたね。

渡辺　ハリー・ジョンソン[※1]の『南北問題の経済学』。こんな厚い英語の本を論評しました。

荒木　そう。ハリー・ジョンソンの低開発国経済政策に関する見解。実に新鮮でした。その次の68年2月25日の号では「ひも付き援助の問題」を取り上げてもらいました。こちらはパキスタンの研究者が書いた本でしたが、当時、大変話題になりました。

渡辺　アメリカのパキスタン援助に関する内容でしたね。

荒木　その時は円借款も全部ひも付きだったから、本が出た途端に政府も目を丸くして（笑）。

渡辺　本の中で著者は、ODAは供与国の方が儲けているという方向に話を持っていって、だから供与国よ、あまり威張るなと主張していました。今だったら取り上げないですが、当時は私も若かったんですよ。

荒木　私自身も、若かった頃のオイスカとの関係を振り返ってみると、間違いなく大来（おおきた）佐武郎（さぶろう）[※2]先生に行きつきます。

※1：ハリー・ジョンソン
カナダの経済学者。アメリカを拠点にイギリスやスイスでも活躍。1976年アメリカ経済学会の副会長に就任。主な著作に『南北問題の経済学』などがある

※2：大来佐武郎
外交官、国際派のエコノミストとして活躍。退官後、日本経済研究センター理事長や海外経済協力基金の総裁を務め、外務大臣に就任。

「荒木君、オイスカって知っているか」と聞かれて、「いや知りません」と。それで、オイスカを紹介されて、「応援してあげてくれ」と言われました。大来先生はあの頃、オイスカの理事をされていたんですか。

中野　日本総局の会長です。もともと、オイスカ・インターナショナルの国内組織として、日本総局というのがありましたが、今は公益財団法人と一緒になっています。

荒木　会長でしたか。それで僕にも「応援しろ」と言われたんですね。僕は忙しくて理事会などには出られないので、なかなかお手伝いできずにいましたが、大来先生が77年夏に参議院全国区で出馬した時に事務局長を拝命しまして……。その時にオイスカからも手伝いに来てくれて、そこからですね、僕とオイスカとの組織的な関係ができたのは。

オイスカの会合に参加した若き日の荒木氏（左）

渡辺　私はその時は関東学院大学にいましたが、学生も動員して、大来先生の選挙運動を手伝いましたよ。

中野　渡辺会長も大来先生の選挙運動を？

渡辺　ええ、そうですね。

荒木　渡辺先生は学生時代から僕たちににらみを利かせていました（笑）。「この人は将来がある人だから」って僕は周囲にしょっちゅう言っていたし、大来先生からも、「ドンドン意見を聞いてあげなさい」「（ジャーナルの）最初の1号2号は渡辺に書かせろ」と言われていました。

渡辺　ジャーナルの初代編集長だった梶谷善久さん（元朝日新聞記者）が可愛がってくれましたね。

荒木　一流の物書きで、二人でよく特訓を受けたよね。文章を書くコツを聞いたりして。大変だったけど、そのせいで渡辺先生は、「経済学者やめて作家になったら？」って言いたくなるぐらい美文を書くようになっちゃったんだよ（笑）。

私がオイスカ・インターナショナル前総裁の中野良子さんに初めてお会いしたのは、70年前後でした。↘

オイスカを国際的に応援する

渡辺　まだ中野さんの若い頃だね。

荒木　うん、そう。でも怖かった。じっとしていて穏やかなのに、貫禄とは違う鋭さがあった。政治家や官僚とも全く別のタイプでしたね。自分の信念や思想を持った人っていうのは、こういう態度と顔つきをするものなのだと思いました。↙

渡辺　全く同感です。

荒木　その頃、大来先生は「僕はオイスカを国際的に応援する」と話していて、国連に紹介したりもしていました。オイスカの認知度を高めるために、「荒木君はＯＴＣＡ（海外技術協力事業団／現国際協力機構＝ＪＩＣＡ）や外務省への対応をしてくれ」と言われました。でも彼らは当時、オイスカに対してそっぽを向いていたように思います。政府からすれば、あまりいい感情を持っていなかったわけです。それはなぜかというと、ＯＴＣＡは政府の機関だから、自分たちは海外に赴任してもだいたい任期が2年と決まっていて、じっくり現地に関わることができない。かたやオイスカは、家族ぐるみで赴任して、何年でもいられる。オイスカが現場密着型でできることがうらやましかったのもあるんじゃないかなぁ。

中野　79年に私どもの月刊誌上で行った座談会に大来先生もご参加くださっていて、その際に「地道であるが、よくもここまでやってきたと感心している。できる限り協力を惜しまないつもりでいる。特に、途上国の人たちの風俗・習慣の中に飛び込み、密着しながら推進してきたということに敬服している」とコメントしてくださいました。大来先生ご自身が感じていたオイスカを、政府内に広めようと奔走してくださっていたんですね。

荒木　大来先生のそうした協力もあり、私も自分のネットワークを活用して、ＯＴＣＡや外務省の中でオイスカを正しく理解してもらおうと努め、徐々にそれが広がっていって、政府の中での認知度も上がり、ちゃんとした評価が得られるようになっていったと思います。

渡辺　オイスカの実績も上がってきていましたからね。後でもお話しする「第2次ＯＤＡ改革懇談会」で、国民参加というキーワードが出てきますが、その目に見える主体がＮＧＯだったわけです。日本政府が進める国際協力の公的な世界にＮＧＯが顔を出したのは、それが最初でしたよね。

荒木　そうですね。ＮＧＯのＯＤＡへの参画が公式化したのは、渡辺先生が２００１年

から外務省の「第2次ODA改革懇談会」の座長になってからですよね。そのようにしてオイスカをはじめとする民間の団体の存在が高まっていったという流れがあるよね。

先ほどの「第2次ODA改革懇談会」では2000年代のほぼ10年間、渡辺先生が座長として、私はメンバーとしてODA改革に関わってきました。当時、外務省では不祥事が発覚して、世の中から叩かれていた。名誉挽回のためには社会的に価値ある仕事をしなければという思いがあったんでしょうね。それを渡辺先生は、拓殖大学の国際開発学部の学部長の時代から学長までの間、関わっていました。ずっと座長ですよ。これも歴史に残すべきことじゃないかと思いますね。

渡辺 いやいや、荒木さんに言われてやっていただけです。神輿は軽いほうがいいって言いますしね（笑）。

荒木 ところで、その頃、オイスカはどんな活動をしていましたか。

「子供の森」計画を世界レベルのプログラムへ

中野 2000年頃は、もう「子供の森」計画（以下、CFP）を始めて10年が経過して軌道に乗ってきている頃ですから、植林をはじめとする環境問題に注力していた時期でしょうか。1980年代から「苗木一本の国際協力」というスローガンを掲げて、海外の緑化活動のための募金を日本国内でスタートさせ、日本からボランティアを派遣して、現地の人たちと一緒に森づくりを進めていました。しかしながら、現地の人たちの植林に対する理解がなかなか深まらず、環境教育の重要性を実感しており、それで1991年にCFPを始めました。これは、急がば回れということで、子どもたちの教育現場である学校を拠点にしながら、緑化の意識を育んでいこうという活動です。オイスカ創立30周年のタイミングで発表しました。CFPがスタートすると、企業や労働組合などの各種団体の皆さんからの支援や参加が増えていきましたね。資金だけではなく、顔の見える支援、実際に体を動かして汗を流す支援をしたいということで、海外の現場にボランティアを派遣できないかというニーズが高まっていた時期でもあり、CFPはそれに応えることができるプログラムでした。現地の子どもたちも、日本の人たちがわざわざお金をかけて自分の学校に植林に来るわけですから、「木を植えるって、そんなに大切なことなんだ」と感覚的に理解しますし、日本人と一緒に植えた木を自分が責任をもってお世話したいという気持ちも芽生えますから、双方にとってよかったと思います。2000年代は、そうした活動の延長にあり、企業の社会的責任の重要性が叫ばれるようになるにつれ、CSR活動として社会貢献を一緒にできないか、という声が高まってきた時期でもあります。また、海外の現場でも、コミュニティの中心である学校でCFPに取り組むことで、結果的に地域全体の森づくりや環境に対する意識の向上につながり、その活動がコミュニティフォレストづくりとして、地域にも広がり始めた頃でしたね。

荒木 CFPは世界的にも価値のある、国連が取り上げるべき取り組みだと思うんですよ。

中野 91年にフィリピンでスタートして、今では37ヵ国に広がっています。オイスカには、長年育ててきた人材が各国にいるからこそできたことです。彼らが自分たちのふるさとを自らの手で守る取り組みとして、地域にその輪を広げていくことで、世界的な広がりをつくることができました。そうした取り組みが認められ、93年には国連の地球サミット賞も受賞しています。国連との関わりでいうと、2010年に生物多様性条約事務局と基本協約を結び、青少年への、環境や生物多様性の保全の取り組みへの参画を促す働きかけを協働で行ってきました。その中の一つ、毎年5月22日の「生物多様性の日」の前後に行われるグリーンウ

上／地球サミット賞授賞式（1993年7月）
下／コロナ禍でもCFP参加校の子どもたちが「グリーンウェイブ」の一環で植林を実施

ェイブ活動も、CFPが中心となって実施しています。

荒木　CFPのような日本発の世界的なプログラムになり得るアイデアは、大来佐武郎先生みたいな人がいたら国連に働きかけているでしょうね。今の日本にはそういう方がいらっしゃらないのが残念です。60周年を契機に、これを国際化して世界レベルのプログラムに押し上げていくことを考えたらいいと思います。↗

渡辺　国際化の議論も大事ですが、私は今、ODAの国内版が課題だと考えています。ここに『松がつなぐあした』という本がありますが、これは、オイスカが東日本大震災の直後から宮城県名取市で取り組んできた長期復興支援の記録です。私もあの大震災の後、あれだけの惨劇を受けて、大学でも教員が集まって話し合いをしましたが、「この震災から復興までの間は国内↖

空腹である限り人類の幸福も平和も確立されない

ODAの時代になる」という議論になりました。考えてみたら、オイスカはこれをやっているわけです。この本は日経新聞の論説委員をされていた小林省太さんが書かれたヒューマンドキュメントで、プロジェクトに関わったオイスカのスタッフや地元の人たち、研究者らの話などをもとにまとめられています。必要な人材は被災地の住民の雇用で賄う。50万本のクロマツを育て、仙台空港のすぐそばにある名取市の海岸100haに植え、10年かけて海岸林を再生させようというものです。そのための費用は10億円かかるんですけど、これは民間からの寄附金でやろうというベンチャープロジェクトですよ、国内版ODA。本来これだけの規模の復興であれば、当然政府が手がけるべき事業なのですが、政府はオイスカに任せた。オイスカの実績、豊かな経験を見込んでのことなのでしょうけれど、日本政府にもそれだけの度量があるということが少し驚きではありました。オイスカは震災直後から動き出しました。10年の計画を立て、協力を呼びかけると、先ほど中野理事長の話にありましたけど、企業の社会的責任「Corporate Social Responsibility」＝CSRとして、何か人様のお役に立ちたいとスローガンを掲げる企業がプロジェクトのためにお金も出すし、ボランティアグループを派遣する。大手の企業もこの一大ベンチャーに加わった。CSRを担う人材を育てるといった効果があったのだと思います。かつてODAには「顔の見える支援」が求められていましたが、100haもの規模の再生された海岸林がはっきり目に見える形になっているというのはすごいことだと思います。顔の見える活動です。

荒木　オイスカは海外でやってきた経験を逆輸入して、日本でプロジェクトをやったってことだよね。

渡辺　日本は今までアジアをはじめとする国々に支援をしてきて、発展を支えてきたけど、日本国内では、少子高齢化をはじめ、このコロナ禍で、どうしようもない格差が可視化されてしまいました。今後、本格的なエネルギーを注いでいくべきは国内じゃないかという気がするんです。もちろん、アジアへの支援は続けないといけませんが、今までやってきた経験を、今後の日本の課題解決に活かすという新しい考え方が必要です。

荒木　60年代から80年代にかけて、オイスカがアジア太平洋の開発途上国で積み上げてきた経験値というのは、日本各地で活かされている気がします。だから、この仕事は一方通行ではなくて、双方向に行ったり来たりで動いている社会運動みたいなもの。国際協力にはそういう価値があるのではないかというのが、最近の僕の見解です。

渡辺　社会運動だという表現はよくわかります。

荒木　政府はNGOに対して、自分たちが好きで海外に行って活動をしているというような見方をしてきた。だから、日本の国際協力の考えの中には、NGOが活躍できる土壌があったわけではないんです。特にオイスカが活動を始めた60年前は全くなかった。でも心ある人がやはりアジアに協力しなくちゃいけないという思いでNGOとして動き出したんです。戦後賠償の後の混沌としたアジアの農村に直接入って、政府対政府の賠償だけではなく、人対人の交流で底上げをしていこうと。もちろんODAも、人と人を結びつける交流をしていたけれど、僕が地方都市に行ったって、政府の人間はアジアの農村部にまでは入り込んではいなかった。僕は70年代からしか知らないけど、当時からオイスカは農村部に入り込んで、大変な思いをしていましたよね。

「海岸林再生プロジェクト」では、被災地住民で組織されたグループが50万本のクロマツの苗を育てた

日本だってまだ未成熟な時代ですよ。行った先がさらにびっくりするほど未成熟なところだから、現地での苦労は相当なものだったでしょうね。

中野　好きで行ったと言われればそれまでですが……創立者は常々、「人間は空腹である限り精神的な考え方を受け入れられるものではない。まずは飢餓と貧困をなくさなくては本当の意味での人類の幸福も平和も確立されない」と人々に訴えかけていました。60年前にオイスカが誕生した頃のアジアは、どの国も食糧難に見舞われていました。オイスカが誕生するきっかけとなった国際会議に出席していたインドの国会議員は、「このままだとインドでは相当の餓死者が出る。何とか援助の手を差し伸べてほしい」と訴え、それに応えて創立者は動き出しました。「食糧を支援しても食べてしまえばなくなる。それよりも農業技術を教えて食糧増産の道を」と呼びかけて、全国から篤農家を募って農業開発団としてインドに派遣したのが始まりでした。

研修農場でインド人の青年に技術指導をする開発団員（左）

荒木　どういう人を行かせるか、派遣する方も大変だったと思います。でも、そうやってだんだんと東南アジアの成熟を図っていく中で、オイスカがたどりついたのは、将来のアジアの発展のために尽くす人の育成をしなければならないということだった。それはJICAでも政府でもやっているけれど、オイスカはもっと泥臭く、地べたに這いつくばっていく人材に行きつくわけですよね。それって、ODAの枠組みの中では一番苦手とするところだと思うんです。だから、アジアの地方の底上げのために汗をかく人材を現地で地道に育てるという、ODAの手の届かないところを民間のオイスカがやっているっていうのは、一種の分業のようなものですよね。

国益を口にする政治家はアジアにとっても絶対に重要

渡辺　今の荒木さんの話を私なりに整理させてください。先ほども話した、「第二次ODA改革懇談会」のキーワードが「国民参加」でした。僕と荒木さんは、本当は「国益論」を前面に押し出したかった。でも、当時はまだその言葉に対するアレルギーが強くて、僕たちより少しシニアの方たちが使わせてくれない。それで最終報告書に載せるのは断念して、二人で悩みながら「国民参加」という言葉を使った。いつかは国益の方向に結びつけられるように頑張ろうって、そんな自覚的な言葉ではなかったけれど、二人の共通の思いでした。ただ、「国民参加」を使ったことでNGOが公的に向上できたのも事実です。僕が書いた最終報告書の第1章の冒頭部分はこうです。

「日本のODAに求められているのは国民の潜在的な意欲や能力を積極的に引き出し、これを開花させるための具体的な取り組みである。開発途上国に向けられる日本人の心、活力をいかにODAに反映させるかが焦点である」

第1章のタイトルは「国民の心と知力、活力を総結集したODA」で、第3章が「NGOとの連携」です。ODA改革に関する最終報告書、つまり外務省のトップレベルの公的なドキュメントの中でNGOについてこのように書かれたのは初めてのことです。

「ODAのパートナーとしてのNGOの重要性が高まっている。NGOとの役割分担をより明確なものにする必要がある。今後はODA政策の実施面だけでなく、策定過程および評価面においても、開発途上国のきめ細やかな情報や多様な経験をもつNGOとの連携を積極的に進める。官と民が協力するとともに、相互に切磋琢磨すべきである。政府によるNGO支援を強化するとともに、NGOに対して体制、能力の強化、適格性、透明性の確保のために一層の主体的な努力を求める」

僕が盛り込みたかったのは、政府とNGOとが対等だという考え方でした。しかしNGOは予算面を含め、厳しさを抱えているから、体制の強化や予算面で協力すべきだという二つの精神をここには書きました。そして次のように結びました。

「日本人は新しい生き方を模索している。青年海外協力隊への若者たちの積極的な参加がその一例である。派遣の2年間に人生の価値を見出したいと考えている若者が多い。貧しい国々の開発事業に新しい生きがいを求めるシニアな人材も少なくない。我が国のNGOもそうした新しい状況のなかで育ってきた。地方自治体や企業、大学にもODA活動への参加の意欲が生まれている。国民参加は単なるキャッチフレーズではない。新しい時代状況から生まれた国民の声である。ODA活動への国民参加は、閉塞感漂う日本社会に新しいエネルギーを与え、日本人としての誇りを大きく発芽させるにちがいない」

政府の文書にこんな情緒的

な文章があるのはめずらしいのですが、私は国民参加、特にNGOの参加が必要だと発信したかった。この後も荒木さんが中心になってPPP（Public Private Partnership）つまり官民連携論を打ち出して、NGO論、CSR論も含め、国民諸階層のすべてを取り込むODAというイメージができ上がりました。それらを結集したものが国益につながるんだという方向に持っていけるように二人で考えたんだよね。ただ、なかなか世の中そうはいかなかったですね。

中野　ODAは、税金を使っているのに、なぜ国益という言葉を出してはいけないのかが理解できません。

荒木　当時の日本社会には、賠償問題も含めた戦前・戦後の状況や、それをひっくるめたイデオロギーの分裂状態がありました。〝相手の国づくりにすべてを捧げる〟といった純粋な開発哲学が登場し、国際益中心時代が長く続きましたが、「アジアの人たちと仲良くして、日本を理解してもらうことがいかに日本にとって重要か」がだんだんと分かってくるんです。国益に通ずる問題提起をずっとしてきた中で聞いた話ですが、マレーシアのマハティールさんが「国益のことに言及しない政治家なんて我々は信用しない。日本の国益を口にする政治家はアジアにとっても絶対に重要なんだ」と、ある政治家に言ったそうです。僕は感心して、それ以来国益を前に出して発言するようになりました。

渡辺　1990年代、日本は世界一のODA大国だったのに、ODAの理念なんて誰も語らなかった。突出した規模のODAを払いながらそこに理念がないなんて、そんな馬鹿なと思いましたよね（笑）。東西冷戦時代、日本はアメリカの立場に立っていましたから、日本独自のODAの理念なんて立てようもなかったんです。91年、湾岸戦争の時、日本は130億ドルも拠出しています。こんなにお金を湯水のように使って、何のためにODAをやるのかというロジックがないのはおかしいという議論が沸き起こった。それがODA大綱につながったんです。

荒木　第一次のね。

渡辺　そう。でもそれを見てがっくりしました。本来であればODA理念というのは、日本が国としてなすべきことが語られるべきですが、逆に「軍事的用途および国際紛争の手段として使ってはならない」ということを前面に出していた。〝何をすべきか〟じゃなくて〝何をすべきじゃないか〟ばかりではおかしい、と感じましたね。

荒木　逆ですよね。それが第二次ODA改革懇談会につながるんですよね。

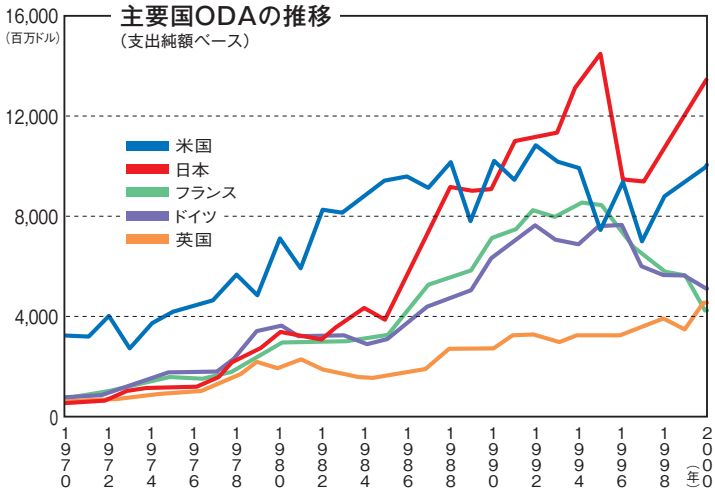
渡辺　そうです。いろんな議論が噴出するんだけど、まとまらないでいました。もう一回本格的な議論を、ということで第二次ODA改革懇談会が始まった。そこで先ほど言った「国民参加」という言葉を使ってさまざまな層を含むことにより、最終的に国民的な理解を経て〝国益〟という言葉につなげていこうと考えました。成文化されるまでには時間がかかりましたよね。

荒木　でも最後、2009年の「国際協力に関する有識者会議」の時は、「国益」という言葉を自然体で使っている。マスコミも叩かなくなったし、表立って国益論が出せるようになった。国民も分かってきたんでしょうね。

中野　日米同盟の体制は同じなのに、国民の考え方が変わることで、政策も変わるものなのでしょうか。それにしても、日本は国連への拠出金も大きかったのに、何も口出していなかったですよね。

荒木　国連だけでなく、典型的なのはアジア開発銀行（ADB）を作る時の拠出金です。アメリカは口だけ出してお金は出さない。日本は一事が万事、アメリカの政策に沿う形にしていたと思います。日米はアジアへの援助を完全に共同でやったんです。日本は軍事力は出さないけれど、率先してお金は出すという、出し方の違いはありましたよ。恐らく、そうすることで、平和憲法を守ったのでしょう。アジアへの支援をするのが大前提だけど、日米関係、アジアとの関係においても、表立って「国益」というと反論されて実行できなくなるから、まずは言葉の上で「国際益」といいながら「国益」を追求するという、二律背反的な苦労を抱えて国際協力を進めてきたというのが実情だと思うんです。だから簡単ではなかったけど、そういう意味での大きな国益を、ODAを通して守ってきた。最終的には、国益論が当たり前で、それ以外にはないというラインに立つことができた。

渡辺　ここまでくるのには時



間を要しましたよね。

荒木　最後のＯＤＡ大綱には、「国益」という言葉が３つ出てくるって調べた人がいましたよ（笑）。話は長くなっちゃったけど、「国益」を追求するって本当に大変だったんだけど、オイスカがやってきたことは実質的には真の国益なんです。70年代後半かな、農村部でオイスカのスタッフに会って、いろいろ話を聞いた時に彼らからは「国益」というキーワードは聞かれなかった。でも、僕が「それって国益じゃないの？」と言ったら、「そうか、自分たちのやっていることは国益につながっているのか！」と。自覚なしに正しい国際協力をやっている彼らに対して〝なんて素晴らしい人たちだ〟と思っちゃった（笑）。しかも相手国の人たちは、オイスカに対して「日本の国益のために俺たちを使っている」とか、そんなことは微塵も考えていない。オイスカって、国益のためのスマートな行動パターンを無自覚に取っているのが味噌。これは妙技といってもいいぐらいだけど、どう思いますか。

渡辺　全くその通りですね。

中野　創立者は、「私たちは今、アジアに出ていくけど、長い目で見ると、いつの日か日本が助けられるようになることもある」という想いは伝えていました。「国益」という言葉ではなかったけれど、そうしたものが現場にいるスタッフにも浸透していたのかもしれません。

荒木　なんとなく組織全体にそういう思想的なものがしみ込んでいるように感じます。

渡辺　他者を利することで、巡り巡って自分が潤うという考えは、開発経済学の中にもあります。「お互いがお互いに報いあう」＝互酬性という、村落共同体のどこにでもあるロジックです。私も山梨県の田舎の農家出身だから分かりますが、村祭りに一番多く奉納するのは富農や豪農。それは東南アジアも同じです。フィリピンは別ですが、東南アジアでは、地主と小作が対立的な関係ではなくて、互酬的に結びついているという事例が非常に多い。小作が病気や事故で働けない時には地主がお金を工面してやるし、村の学校運営や慈善事業、冠婚葬祭があれば地主が多くお金を払う。そうやって小作を助けることで、小作は地主に無償の労働力を提供したり、地主の地位や権威、安寧までも保障するという互酬的な関係が保たれます。もし、小作からの信頼を受けられなければ、小作料がごまかされないよう監視人を雇う。すると費用がかかるわけです。結局は、人間関係を安定的、かつ低費用にするには互酬的な関係を維持することが大事なんです。この中に、先ほどの他者を利することによって自分が潤う、つまり「啓発された利己心」〝enlightened self-interest〟という考えが含まれてます。このロジックを、ＯＤＡなりＮＧＯの活動の精神にもってくることが必要だと思うんです。

過去を言語化し「未来」に向き合うことが必要

中野　利他の精神、あるいは昔は、幸せというのは「仕え合う」と書いたわけですが、アジアの地域開発に行った人たちは、そういうものが言葉ではなくて身にしみていた真の日本人でした。ただひたすらに「自分のできること」をなし、「人として生きること」に向かい、アジアのためとか、この人たちのためではなく、自分の生きがいだったのでしょう。渡辺先生が週刊『世界と日本』に書いておられた「無我夢中が最上の幸福の状態」を読んだ時、インドで大地に向かっていた彼らの姿が浮かびました。実際、大変な苦労だったと思われるような話も、一言の愚痴もなく「楽しかった」と笑顔で語ってくれました。彼らの努力の結果として、インドの食糧増産に貢献できたのだと思います。当時の活動を振り返ると、本当によくやってこられたな、と今でも目頭が熱くなります。これが日本人なんだって、心底思わされます。

渡辺　荒木さん、『一つの国際協力物語―タイのモンクット王工科大学―』とか『アフリカに大学をつくったサムライたち―ジョモ・ケニヤッタ農工大学物語―』をお書きになりましたよね。ＯＤＡ支援で現場に根づいているものを、目に見えるストーリーとして記録するって本当に大切なことですよね。荒木さんの功績は大変に大きいと思います。オイスカもこれまで農業開発や森林再生に取り組んできましたが、その過程で人間をどう育てたか、どういう感覚を持った人間を世に送り出したかについては、あまり語られていないんじゃないかな。オイスカだけじゃなくて、海外進出した日本企業の従業員教育の在り方などは、もっと強

アフリカに大学をつくった サムライたち
ジョモ・ケニヤッタ農工大学物語
荒木光弥著
2015年発行／四六判280ページ
2000円(税込)／国際開発ジャーナル社

一つの国際協力物語
タイのモンクット王工科大学
荒木光弥著
2012年発行／四六判240ページ
1890円(税込)／国際開発ジャーナル社

台湾を築いた明治の日本人
渡辺利夫著
2012年発行／四六判260ページ
1870円(税込)／産経新聞出版

調されていいと思います。その国の生産性の向上や輸出にどれくらい貢献したとか、技術をどれくらい移転したとか、マクロ的な評価はできるけど、目に見えない、数字では表現できない貢献も多くあったはずです。私も対中国の円借款事業の調査に行った時、フロントラインで活躍した日本人やそこで育った中国人から、涙が出るような話をたくさん聞きました。そういうことって、文字化しないと消えてしまうんです。

荒木　モンクット王工科大学の話は、僕は日本語でしか書いてないけど、現地でタイ語と英語で出版されて話題になったらしいの。大学側は日本のODAで建てられたのは分かっているけど、どういう経緯で誰が関与したのかが分からなくなっていたんです。

渡辺　だから本の形で残すことも、多言語で出版することも、すごく大事ですよね。

荒木　現地側にレポートがないから、僕の本が唯一の歴史の証言だってことで、立派なタイ語の本になって学生がみんな持っています。地道な活動は、ODA白書でない形で、その過程も成果もちゃんと表現していかないといけませんよね。

渡辺　そう。借款、贈与、そのほか日本の支援が現場に何を残したのかという検証を徹底的にして、目に見えないものをも含めてこれらを言語化しなければいけない。ODAの分厚いレポートが出されるけど、マクロ的な数字だけでは先ほど中野理事長が言われたような、日本人的なものは浮かび上がってこない。丁寧に拾っていかないと消えてしまうものが多いんです。なんで日本人はそういうことしないんでしょう。私も『台湾を築いた明治の日本人』という本で、何人かの日本人を取り上げましたが、あれほどの大事業を通じて台湾に貢献した人のことを、日本人が知らない。オイスカでも60周年を迎えるにあたって、これからの10年に向けた計画を発表しますが、自分たちの過去を振り返って、何を残してきたかということを徹底的に検証して、その上に立って次の10年を考えないといけないと思います。

荒木　10年計画じゃなくて、思い切って、「100年目のオイスカ」という話を書いたらどうなるかということをふと思ったのよ（笑）。

国や地域を飛び越えた地球規模の思想を

渡辺　100周年！

荒木　40年後だから、想像でしかないけど、日本の社会がどういうプロセスで発展しているか、中国やアジアの国がどうなっているのかを併せて、「100周年を迎えたオイスカ」を書いたら面白いと思うよ。ベストセラーになるんじゃないかなぁ。渡辺先生はアイデア出てくると思うよ、頑張って。

渡辺　そこまではできないけれども、過去を検証して未来に生かすこと、未来を見据えて過去を言語化することは本当に大事なことです。オイスカらしい色を出した10年計画にしたいですね。

荒木　さっきも話したけど、CFPは国際的に出しても遜色のないプロジェクトですから、国内の各界でコンセンサスを得て、未来に対する投資だということで拡大していきたい。世界の「子供の森」にしたい！　それが、今日言おうと思って僕が夕べ寝ずに考えたこと（笑）。

中野　CFPは今年が30周年になります。開始当時は、「学校単位での森づくり」というのがメインでしたが、今は植林をする土地が十分にとれない都会の学校でも、自分の地域のゴミ問題や伝統的な植物を守るといった、森づくりだけではない幅広い環境教育の活動になってきています。また、有機野菜栽培に取り組んで給食に活用するといった栄養改善や、手洗い場などの充実といった衛生環境向上のための支援も増えてきています。CFPは〝プロジェクト〟ではなくて〝プログラム〟ですから、小さな資金と人数でも学校と連携して一緒に活動できますし、地域の小さな困りごとにも対応できます。そうやって地域を巻き込みながら継続していくことで、大きな資金を投入して地域全体の発

展を目指す、大きなプロジェクトの候補地となり得る事例が多く出てきています。

荒木　CFPは、世界的なレベルで誰からも賛同を得られる根っこを持っているプログラムですから、これを世界規模で広げていくことこそ「目に見えない国益」につながりますよ！

中野　昨年、CFPの37ヵ国目、アフガニスタンで新たに活動が始まりました。オイスカは現地に拠点がありませんが、現地のカウンターパートのNGOが取り組んでくれています。つい最近の陥落で心配していましたが、現地のカウンターパートからは実施については問題ないと連絡がきています。

タイ北部で進められた日本NGO連携無償資金協力によるプロジェクトでは、20年以上前にCFPがスタートし、植林意識が根付いていた村で、生計向上のために森を有効活用する取り組みが行われた。現在は他県からの視察も受け入れている

荒木　万人に通じる思想だからです。木を植えるのも大事だけど、それが子どもの手で行われていることがもっと大事で、それを社会や地域が認めていくということがさらに大切。未来創造性の高い、日本の誇りとなる仕事にするためにも、もっと広げていきましょうよ。実をいうと、30年前はここまでの意義を僕は理解できていなかった。オイスカ全体もそう。先代の総裁はよく星とか宇宙の話をしていたけど、その時は「え？」と思っていた。けれども、今となってみるとまさに正解なの。目の前の個々の問題が、地球規模で考えなければいけないレベルに来ているでしょ。今なら、宇宙から地球を見たらどうかと考える次元に来ている。さっきは国益の話をしたけど、ナショナリズムとか、個々の国の争いよりも、地球がどうなるかという問題に人類は直面しつつあるわけだよね。宇宙から地球を俯瞰するみたいな前総裁の話は、歳を取ってくると「すごいなあ」と思えるようになって、オイスカの先見の明には、つくづくびっくりしているところです。今が、理解するドンピシャの時代なんだよね。だからオイスカは、ちょっと早すぎちゃった。

中野　早すぎましたね。でも創立者は、そういう思いをオイスカに託したということだと思います。それから、私もCFPは地球の未来を子どもたちに託す大事な活動だと思っているので、荒木さんにそう言われて、今日はとてもうれしく思いました。

荒木　どこの国にとっても子どもは大事だし、森っていうのは象徴的な言い方で、実際には環境のことだから、もうこのやり方しかないと思うけど、それを30年も前から具現化して活動にしているってすごいことだと思うよ。こういうことをやろうと発想するって、ただのインスピレーションじゃない。哲学を持ってなければできないこと。

創立者のことば■中野典之助

人は宇宙の縮図

人間は天地宇宙の縮図である。人間は世界人類一律にその大自然の法則に基づく人間なのである。人が生きているのは断じて"すべて宇宙の御意に発し、宇宙大生命の中は神の力で満ちられている。この世の中は神の宮なのである。人間は宇宙真理に基づいて造られている。うつし宇宙の縮図の体であることを心から人類は地球万物とともに宇宙意思によれている存在である。人は宇宙大生命と参与され、活動しているものである。かに知るならば、自然に人間の生命の尊にとって最も大切なことは、万物・万生ことである。親を知ることが人間としての多知ることによって己を知ることに至るのである

荒木氏がオイスカに関わるようになった70年代、月刊「OISCA」に掲載されていた「創立者のことば」のタイトルのほとんどに「宇宙」という言葉が見られる（写真は1975年8月号）

渡辺　スピリチュアルな感じって理解されなかった時代があるけど、これからは恐らくコロナとも共生していかざるを得ない。今はステイホームで、オフィスにも行かずにいる時代で、スピリチュアルなものに人間の心が向いていく時代になると思うの。オイスカの創立者が訴えてきた、地球的哲学が人々の心にストレートに響く時代が来るかもしれませんよね。

荒木　長く付き合って見てきた人間じゃないと分からないかもしれないけど、僕は大来先生に言われてずっとオイスカを見てきたつもりで、本質的なことを言うと、オイスカは世界的な哲学を持った団体だよね。万国共通の課題に当てはまるものを持っているんですから。そういうものを思想と呼ぶと思う。こっちの国にとってはいいけど、あっちの国にとってはダメっていうものは地球的な思想にはならない。昔のオイスカの本なんかは、必ず宇宙って書いてあったよね。原点に戻って宇宙から俯瞰的に地球を見ようと訴える時代が来たのかな。60年を重ねて、国や地域を飛び越えて、地球規模の思想を真剣に広げていくことを考えることも大事だよね。

中野　今日は懐かしい大来先生の話をおうかがいできましたし、日本のODAを通じた国際貢献に大きな貢献をされてきたお二方から、オイスカのやってきたことが日本の国益にも通ずることだと明言いただき、うれしく思います。渡辺会長が言われる通り、目に見えない部分のこれまでの成果についても、しっかり検証していく必要性を感じています。これから先も長くオイスカをサポートいただければと思います。今日はどうもありがとうございました。